

12 「使う人は誰なのか」 —ユーザー目線で生活環境を創造する 組織設計事務所におけるインテリアプランナーの役割



坂東市役所 1階 エントランス・市民待合スペース

市民の集いの場であり、災害時の拠点となる。1階から4階まで一体となった大空間にソーラーチムニーを併設して下から上へ自然の空気の流れをつかった。コンクリートの構造物にはマットな塗装をかけてやすらげる空間に仕上げた。



坂東市役所 1階 市民待合スペース

市民共同参画に向けて、市民の交流の場となるよう開放感と居心地良さを追求した。地域ゆかりの平将門に因み、力強い和のモチーフを採用。お盆や縁台をイメージしたどこからでも座れるソファを置き、「市民が来たくなる」ひろばにした。



1



2

①② JAむさし ランチルーム

農業協同組合のオフィス建築で、従業員のランチルーム兼、地域組合員の交流の場となるようデザインした。高い天井、たっぷり採光の気持ちのよい空間で、組合員のための料理イベントなどが行われる。ステップフロアの下が食事スペース、手前の高くなった部分はリフレッシュ＆ライブラリースペースとなっている。平日昼時は従業員がランチタイムをゆったりと過ごせ、働く環境の向上にも寄与する。

心地よい空間を、使う人の目線で

私の所属する会社は、市庁舎や文化施設、オフィスや医療施設など公共的な建築を数多く手掛ける建築設計事務所です。社内に、意匠設計、構造設計、設備設計を始めとして、マネジメントや品質管理までの各種専門家組織を有し、その中で私はインテリア設計を担っています。

近年、市役所や病院など公共的な建物におけるインテリア設計の役割が重要視されてきています。それは、実際にその空間を訪れる市民の方や患者さん＝使う人が心地よいと感じる空間にしなければ、結局利用されない建物になってしまうから。そのためにインテリアプランナーの果たす役割が大きいのです。

例えば市役所であれば、従来は市長さんなど自治体トップの方々と打合せして物事が決まっていたものを、それとは別の観点（実際に使用する市民の立場）からの要望を入れて空間がでないかと動くわけです。坂東市役所（茨城県）では、市民目線で「こういう

ものがあれば」とインテリアの立場から提案して、それを形にしていこうというのをやりました。市庁舎を利用するのは市民だから、市民の皆さんにこの施設を気に入ってもらえないと、長い間それを大事してもらえません。市民が使いやすく心地よいと感じる建物にするにはどうすればよいかを、トップの方々に説明して納得してもらったのです。

さらに公共の建物の場合、トップが交代した後も人々に愛され続けるように、計画の時のトップとの話は大事にしつつも、「本来そこを使う人は誰なんだろう」という視点で形をつくっていきます。それもインテリアプランナーの役割だと思います。

建築設計とインテリアプランニングの コラボレーション

計画に当たっては、建築設計の担当者とは歩みを共にしながらインテリア設計をまとめるのが基本的なスタイルです。建築設計のコンセプトを徹底で意識しつつ、インテリア独自のコンセプトをつくり、インテリアデザイン

佐藤 勝さん

(さとう まさる)

一級建築士、インテリアプランナー、
認定ファシリティマネージャー (CFMJ)。
株式会社久米設計 インテリア設計部副部長



《経歴》

1961年生まれ。千葉大学工学部建築工学科卒業。Knoll International Japanを経て、1995年、株式会社久米設計に入社。インテリア設計部に所属し、建築設計との協働で市役所、病院、オフィスなどの公共的な建物を手掛ける。

《実績》

- ・ライトオン筑波本部 (2006)
- ・茨城県立こころの医療センター (2011)
- ・JA東京むさし本店 (2012)
- ・中東遠総合医療センター (2013)
- ・坂東市役所 (2016)

ほか多数

《受賞歴》

- ・日経ニューオフィス推進賞
(クリエイティブ・オフィス賞)
(JA東京むさし) (2013)
- ・医療福祉建築賞
(茨城県こころの医療センター) (2013)
- ・医療福祉建築賞 準賞
(中東遠総合医療センター) (2014)
- ・日経ニューオフィス奨励賞
(坂東市役所) (2017)
- ・インテリアプランニングアワード2018
優秀賞 (坂東市役所) (2018)

ほか多数

はもとより家具、アートワーク、サインに至るまで、建物全体として統一されたイメージになるようにデザインを進めています。

その際、同じ組織内で設計が行われることのメリット・デメリットを常に意識しつつ、建築設計のコンセプトに同調し過ぎることのないようデザインしていくことが肝要だと思っています。建築設計のコンセプトをそのまま汲んでインテリアをつくと、どうしてもある意味硬いものになってしまいます。けれど実際に使う人がそれを本当に心地よいと感じなければ、ユーザー目線での生活環境という観点からそれたものとなりがねません。使う人の観点から意見を言って、それを建築設計の人たちに気づいてもらうのも私たちの仕事。その辺りの建築設計とのさじ加減担うのがインテリアプランナーだと言えます。